

## 四谷見附橋

よつやみつけばし

江戸三十六見附のひとつ四谷見附付近には、北側の市ヶ谷見附に尾張徳川屋敷（後の陸軍士官学校—自衛隊基地）、南東の喰違見附に紀伊徳川屋敷があり、江戸城防衛の一つの要であった。

紀伊家屋敷は、明治5年（1872）4月赤坂離宮と定められたが、翌年5月皇居炎上にもなってここに仮皇居が置かれ、17年の間それは続いた。赤坂離宮は明治42年6月、10年の歳月と510万円の巨費を投じて建て直された。フランス・ルネッサンス様式をはじめとする18世紀末から19世紀初めの様々な様式を使い分け、外部はネオ・バロック様式に統一された明治期洋風近代建築を代表するものである。

明治に入り東京には、馬車・人力車・鉄道馬車といった新しい交通手段が次々に登場し、明治27年（1894）10月には甲武鉄道（現在のJR中央線）飯田町—新宿間が開通して四ッ谷駅が開業。36年（1903）8月には市街電車が営業を開始し、12月には四谷停留所が設置された。東京の街は、近代国家の首都として、銀座煉瓦街計画に見られるような都市の不燃化や道路の整備など、その面目を改めるべく改造が急がれていた。

四谷見附橋をふくむ道路整備も、東京市区改正事業の一環として、明治43年（1910）2月に市会を通過、翌年4月架橋工事に着手、大正2年（1913）9月、29万円の工費を費やして橋は完成した。

そのデザインは、花崗岩積みで隅を押しえ煉瓦積みを外殻とするコンクリートの橋台、茶褐色に塗られたアーチ、正門まで約400m離れた赤坂離宮との調和をとってネオ・バロック様式の高欄、橋灯などで飾られた。これも近代の橋梁技術発展の中での一道標といえる橋である。橋灯を載せた石の台には、技師長日下部弁二郎・橋梁課長樺島正義以下工事担当者を記した銘板がはめ込まれていた。構造設計の主務は川地陽一、装飾設計は田島穠造であると考えられている。

以来数十年、都市の発展にともない四谷見附橋を含む新宿通り（放射5号線）も拡幅整備されることになり、昭和49年（1974）橋の架け替えが起きた。それが伝わるや、長年にわたり地域に根づいた名橋を惜しむ声が高まり、委員会等種々検討の結果、架け替える橋の形はアーチ状方杖ラーメン、高欄・橋灯などは旧橋のそれをできるだけ再利用して、往時のイメージを保存することになった。一方、撤去された橋体は、多摩ニュータウン別所長池地区に移設、経年の中で失われた飾りも復元、往時の姿が再現され、機能としては新しい橋としてよみがえった。

四谷の見附橋は平成3年10月に、多摩の見附橋は長池見附橋として、平成5年11月に、それぞれ竣工式がとり行なわれた。歴史を伝える橋は、二つの場所で、二つの形で今後も人々に愛され続けることになる。

〔T J〕

	(旧橋)	(架替)	(移設)
竣工年月	1913年10月5日	1991年10月5日	1993年11月22日
所在地	東京都千代田区—新宿区	旧橋に同じ	八王子市別所長池地区
橋長・幅員	37.186×21.946m	44.4×39.0m	37.606×17.4m
支間長	34.138m (ヒンジ間)	41.0m (ヒンジ間)	34.138m (ヒンジ間)
形式	上路2ヒンジアーチ	アーチ状方杖ラーメン	上路2ヒンジアーチ

